

## 皐月雨

大宮 純

うす暗い照明の下で、厚着をした患者と付添の家族が青緑白の長椅子に並んでいた。全部で十列もあるスペースは、殆ど埋まっていて、二人、一緒に座ることが出来なかった。暖房を落としたフロアは寒く、オーバーを脱ぐことは出来ない。毛糸の帽子を被り、マフラーを首に巻いて皮の手袋をはめたまま、受付の看護師が呼びに来るのを待った。順番を待つ間、みな虚ろな目で空間を見つめ、隣と、言葉を交わすこともない。

右足の甲に痛みを感じて、左足の踵を甲の上から防寒

ブーツを履いたまま押した。痛みが和らぐと同時に左の肺がひくひくと動いて、喉元に痰が浮かんできた。靴からテイスシュを取り出して、マスクを外し、痰を吐きだした。痰の色はどす黒い黄緑である。今朝、測った体温は三十七度二分だった。普段は三十五度を切っている。間質性肺炎が完全に治っていないのだ。多発性骨髄腫の治療薬・サレドを服用したことで、身体が弱っているのかも知れない。

丁病院の血液内科は、被災地から搬送された患者の診察が優先されていることもあって、外来患者は通常時よりも多く、予約した時間の十時は二時間半も過ぎていた。急に体力のエネルギーが切れたのを覚えて、ポケットの飴玉

## &lt; 小説 &gt;

を指の先に掴み口へ入れた。

## &lt; 皐月雨 &gt;

診察室に通じる入り口へ、三冊のカルテを抱えた看護師が現れた。「俺の番かも知れない」と、感が働いた。

「番号札、九百二番でお待ちの方。番号札、九百二番でお待ちの方」

「はー」

小さく返事をし、椅子から立ち上った。一瞬、貧血気味になって、頭がくらくらした。席で私の動きを追う妻の美登里へ、ちょっと頷いて見せながら、ゆっくりと、入り口へ足を進めた。震災後の清掃が行き届かないせいなのか、カーペットの上が乾いた泥で汚れている。

目の隅に車椅子を押す女性と患者の姿が入った。見覚えのある動作だ。立ち止まって、横を向き確かめた。二人とも中学校時代の同級生であった。柔道を一緒にやった仲の彼は、死の危機に瀕しているらしく、身体が丸く縮まり首をぐらぐらさせている。看護師に急かせられ、さっと隣の通路へ消えていった。声を掛けることも出来ない、あつという間の出来事であった。

「あいつとは、もう会えないのかもしれない。おれだって、いつ……」

哀しい気分を抱きつつ、よろめきながら、診察室二番

の前にある長椅子へ腰を下ろした。ボタンとドアを開める音がした。隣の診察室三番から出てきた若い女性が、父親らしい男性の座っている横へ、崩れ落ちるように座った。

「……あと二年しか生きられそうにない」

という呻き声が、かすかに聴こえた。多発性骨髄腫に罹った患者の生存率は、極めて低い。

「諦めるのは早い。……治療は先生にお任せしてみるしかない」

暗い声で男性が励ましている。四番の前の椅子では、肩まで長い髪を垂らした革ジャン姿の若者が、肩を落として、踵の高い靴を履いた制服姿の女性に背中を抱かれています。

「九百二番の方、診察室二番へどうぞ」

主治医である権藤警医師の声が、スピーカーから聴こえた。「ノックしてからお入り下さい」という張り紙を見た。コツコツと小さく叩いて、直ぐにドアを開け、

「失礼します」

中へ身体を運んだ。手に持っているオーバーなどを、荷物置台に乗せた。

「川代さん。どうですか、その後は」

相手の唇は干からび、白髪は艶がない。なぜか、

目が虚ろだ。

丸い椅子に腰を掛けて、

「薬は一日分、飲み残しました。吐き気や眩暈、中耳炎、頭痛で続けられなかったのです。いまは微熱と咳、痰があります。脚の付け根と足首、甲が痛みます」

「ふーん。で、……残った分は持って来たんでしょ」

持っていたボールペンを、指の間で忙しなく動かし、口の先を尖がらせている。残念だな、がっかりした、という塩梅の声だ。

「はい。いま、出します」

靴から、服用の記録とカプセルの入ったバックを取り出して、相手へ渡した。

「百ミリで、そんなに副作用が出ないと思うけどなア。…

…ま、仕方がない。で、どうします、今後は……」

相手の答えを聞いて驚いた。製薬会社が発行する冊子には、サレドの服用によって、吐き気や感覚の麻痺、関節の痛み、意識の低下、眩暈などの重大な副作用が現れると記されている。自ら研修の場で、私と妻へ説明していたことを、覚えていないのか、と疑った。

「症状が落ち着くまで、しばらくお休みさせていただき、良くなったら服用したいと、思います」

## < 小説 >

「どれくらい。……薬は、一か月間用意してあるんですよ。困ったな。……もうちょっとで、数値が改善されるかも知れないのに」

穏やかな声なので、安心して相手の目を見ると、少し怒りが混じっていた。

「残りの分は、処方していただいても、……構いません。そのあとも、ずっと続ければ効果が出ると思うのですが。……服用すると、このまま死んでしまいそうで、生きていく気がしないのです」

サレドは一九五〇年代の後半に、催眠鎮痛薬としてドイツで開発され、日本でも、サリドマイドという薬名で、催眠鎮痛薬や胃腸薬として広く使用され、また、つわり止めとしても処方された。しかし、妊娠中に服用した場合、胎児への重大な障害や死産を引き起すことが明らかとなり、販売の中止と回収が行われた。

海外では、医薬品市場から撤退したあと薬効の研究が続けられ、一九九九年以降、多発性骨髄腫の治療薬として国際的に開発が進み、日本でも薬監証明を受けて個人輸入を行っている病院が増え、二〇〇七年度における施設数は、約三百となっている。

現在は、H製薬株式会社が厚生労働省から製造販売承

## < 臯月雨 >

認を受けて、製剤「サレド」として使用されているのだ。

「それはねえ、考え過ぎですよ。ま、大丈夫でしょう。分かりました。……まず、血圧と心臓の動きを測りますかね」

頼りのない答えだ。患者が通常よりも多く、忙しすぎて疲れが溜まっているらしい。目が窪んでいる。

聴診器を背中に当てながら

「血圧は低いいけれど、心臓は正常です。処方して構わないとのことですから、残りの二週間分は出しますね。次の予定日を決めましょうか」

「はい。月曜日ならいいです」

服をズボンの中に収めてバンドをしめた。

「今日の結果はまだ出ないから、なんとも言えないけど。先月の検査では……」

相手は、デスク・トップ型パソコンの画面に視線を置きながら、声だけ私へ向けた。画面には、前回の血液検査の結果が詳細に記録されている。入院中の数値と殆ど変わらず、がん化した形質細胞である骨髄腫細胞の数値は、異常に高い。

「白血球も増えています。これはね、間質性肺炎が大分良くなっても、白血球の数値は、それと同時に下がるわけで

はないんです。時間の経過とともに後から落ち着いていく関係にありますからね。……えーっと、次の予約は……。慣れないんですよ、新しいパソコンに」

画面を切り替えて、診察日の一覧と患者の予約状況を検索している。

「先生。二週目の月曜日の上へカーソルを持って行って、クリックするといいいのではないですか」

まごつく相手の動作がじれったくなり、アドバイスした。

「ふーん。見て分かるんだア」

外来の窓口で、前回の結果一覧票を受け取り、会計清算機前に並んだ。保険診療分の他に、コピー代として九十円支払った。一覧票の印刷代は、サービスではなく、保険外扱いになっているのだ。

検査結果の一覧票が欲しいと、権藤医師に頼んでも、「なんで、一覧票なんか要るんですか。見てもわからないでしょ」

出すのを渋る。

外来の看護師たちは

「おかしいですよ。患者さんには、検査結果の詳細を知る権利があるのに。権藤先生へ後で報告して置きますか

ら」

「すみませんが、お願いします」

彼女たちの応援で、貰っている。

私は、美登里と一緒に検査結果の項目と数値を、国際骨髓腫財団日本連絡所発行の『多発性骨髓腫ハンドブック』の記述と照らし合わせて、進行具合を確かめているのだ。

大畑村で被災した歯科医師・前田京介の救援と、セクハラを受けた被害者・大館充子の本人訴訟を支援するために、体力と気力を使い果たした。咳と痰が収まらず、サレドの服用が出来ないままに、次の診察日を迎えた。

丁病院の血液内科の外來待合室は、患者で溢れていた。相変わらず、照明を落としたうす暗いフロアには、マスクを付けた患者の姿が多い。オーバーを着ているのは、私だけであった。飲み残した二週間分のカプセル入りケースが、鞆の中で、音もなく静まり返っている。

診察室入り口の上に架けられている時計が、刻々と診察の瞬間が迫るのを知らせている。気になるのは、「権藤先生は、どのような診断を下すであろうか」、このことであつた。

診察券の番号を呼ばれて、席を立った。美登里へ脱いだオーバーとマフラーを手渡した。

診察室へ入ると、権藤医師は、

「どうですか。その後は」

「咳と痰が収まりません。汗を大量にかきます」

「ふーん。……で、サレドは服用したのオ」

「一日も飲めませんでした」

「なぜ……。なんでエ」

怒っているのが声色で分かった。

「怖かったのだと思います」

「被災者の救援とセクハラ被害者の支援のために時間を費やし、副作用と闘う時間が取れなかったのです」とは言えない。

「だったらさア、あなたはねエ。……今後は一体、どうすんのさア。エーッ」

突然、相手がブチ切れて、握っているボールペンを机上のマットへ放り投げた。ぎょっとして顔を見た。口を尖がらせ、目を吊り上げている。頭の髪まで逆さ立っている。転がったペンの先が、ナイフのように鈍く光った。

「抗がん剤を、絶対に服用しないというのは、決してありません。ただ、今は怖いのです」

### < 臯月雨 >

「ふーん。ま、いいやア……。次に診た上で、今度は五十三ミリに変えましょうか」

パソコンへ向かいながら、穏やかな声で訊いた。さっきの権藤は嘘のようだ。

次回の診察日を決めて部屋を出た。

十年前に発症し、五年前に自己末梢幹細胞移植術を受けた頃は、真面目で気さくな面を持つ主治医だった。肺炎で二度目入院した時には、まだ人間の温もりがあつたのに、と泣き出したような感覚に襲われ、つとつと一滴、透明な涙が頬を濡らした。掌で拭う。

胸の中に、まだ残っていた権藤への信頼感がぐらつき始めた。

### 二

「このままでは、抗がん剤で骨髓腫の数値は下がりましたが、でも、命は亡くなりました。と、なりかねない気がするな」

帰宅する途中、権藤とのやり取りの様子とともに、胸に浮かぶ不安感を美登里へ喋った。

「ひどい言い方をしたのね。呆れるわ。いくら何でも、ボ

ールペンを投げるといふのは、あんまりだわ。せつかく、いい選択をしたと思っていたのに。……ゆつくり、焦らずに考えてみましょう」

彼女の眼に、涙が膨らんでいる。車窓から朝日橋へ目をやると、橋の下を流れる北上川が見えた。雪解けで水量が増している。橋脚を洗う、冷たそうな流れが、肺炎で入院した当時の記憶を鮮明に蘇らせていく。

臯月雨の中、朝日橋の橋脚が見えなくなるほど水量が膨らんでいる。重症室のレザー椅子にふんぞり返り、長い脚を組んで課長に対し、

「組合員を増やすためには、這いつくばって歩け。パソコンに向かって文書を書いていたら何にもならないんだぞ。残業をしないで暮らしたいのは分かるが、日中は訪問活動をしなさい。大体、専務が悪い。ろくに仕事もしないで、劇団に熱を上げているから、この様なんだア」

と怒鳴る声が部屋中に響いた。随分と荒っぽい男だなと、思っ、相手の顔を覗くと自分がいた。これは変だなと首を傾げた。私は、これほど威張る人間ではない。第一、脚がこんなに長くはない。

「すみませーん。どうぞ許してください。息子を塾に通

わせないと将来、出世出来ないんです」

女性の専務は、そう言っただけで、平べったい顔をしかめ、急に泣き出し、床へ土下座した。後ろでへらへらしている息子を睨むと、突然、相手の顔が課長に変わった。課長も革靴を脱いで土下座し始めた。

「おいおい、あんたたち、そんなことをしたってね、騙されないぞ。過去のことは良いから、真面目にやってくれ。なんだったら、俺に手当を払ってくれれば、増やしてもいいんだよ。一日に十人くらい拡大するのは簡単」

と、おかしい男の自分が喋っている。

「なんだと。テーマ。黙って聞いていれば好き放題なことをくっちゃべってさあ。こいつなんか、やっちゃまえ」

口の耳まで裂け上がった専務が叫んだ。天井に空いた穴からロープを伝って黒い革ジャンの男たちが下りてきた。自分らしい男は、咄嗟に、レザー椅子を回転させて窓際に逃げ、ガラスに身体をぶっつけた。降り立つたところは、映画館の多い大通りだった。数寄屋風建物に駆け込んだ。「どこへ行きやがった。見つけたら殺せ」

狂った専務が怒鳴り散らし、部下の集団が周りを忍者のように動き回る。みな顔に黒い覆面をつけている。軋む階段を上ると、四方は、板壁で囲われ、屋外への逃げ道は

なかった。太陽光発電用の機器が屋根を覆っている。

梯子を昇って屋根の上へ這い上がった。足元のガラスが割れて地面に落下した途端に、全身にガラスの破片が刺さって激痛が奔った。

「ウァーッ」

悲鳴を上げた。その声を聞いて目が覚めた。声の主は自分である。夢の中に居たのだ。ベッドの布団が脇にずり落ちていて、体中が燃えるように熱く全身が痛い。体温計で測ると四十度を超している。

隣で寝ている美登里が異変に気づいて目を覚まし、

「克俊さん。どうしたの。……これは大変」

階下に降りて息子に何かを指示するのが聴こえた。

息子の家族は東京から帰省し、年末年始を過ごし、娘の家族も同じ日程で帰ってきた。

「起き上がって、歩けるか」

二階に上がってきた息子が尋ねる。呼吸が苦しく意識が朦朧とし、全身の痛みと疲労とで歩くのも容易でない。

「……大丈夫だよ。痛……。何とかなるさ、……この位は」

ぐらつく身体にオーバーを羽織らせてもらい、階段を下りた。

## < 臯月雨 >

「お祖父ちゃん。頑張って」

と、孫の優香がバジヤマ姿で声を掛けてよこした。

「行ってくるよ。……櫃んこに乗って遊ぶんだよ」

マスクをつけて毛糸の帽子を被り、防寒靴を履いて外へ出た。猛吹雪である。煽る風に抗して乗用車のドアを開けた。

気が付くとERに収容されていた。「エマーゼンシー。エマーゼンシー」という言葉が交わされる映画のフッシーンを思い出した。送風口から熱風が送り込まれ、酸素吸入器が顔の半分を覆っている。

肺に送り込まれる酸素の濃度が最高値に設定されているらしく、吸入器の隅から外へ流れ出す風でまつ毛が抜けそうだった。吐きだす息が、外からの圧力で押し戻される。手首に翼状針が取り付けられて、管から体内へ抗菌剤と抗生物質が注入されている。身体に冷たい汗がひっきりなしに浮き出して、下着を濡らし、肌べっとり巻きつく。熱風で汗が冷たい水のように変わり、氷のプールに浸かっているかのように寒い。

付き添っている美登里へ、やっとのこと、

「湯たんぽを足元と腰の脇へ頼む。下着を交換してくれないか。……その前に、身体を拭いてほしい」

彼女がナースコールのボタンを押して、ナース・ステーションとやり取りする。すぐに看護師がやってきて、暖かいタオルで身体を拭いてくれた。看護師の衣服を見て

びっくりした。夢を見ているのかと疑った。下着一枚の上に白衣をつけているように、肌が透けて見えるほど薄着だ。美登里も汗だくとなって、上着を脱いで付き添っている。

権藤医師が半袖の白衣で、聴診器を胸に下げたまま部屋に入ってくると、

「どうですか。調子の方は」

「胸が苦しいのと、……全身が痛いので大変です」

酸素吸入器を外して答える。

「あ、訊くのが野暮だったね。皮下血中酸素飽和濃度が七十八と異常に低くなっています。吸入器は出来るだけ外さないでくださいよ」

相手の眼は少し緊張している。

「落ち着いたら、サレドの服用を考えてください。そうしないと、抵抗力がつかないからね」

こんな生きるか死ぬかの瀬戸際の中でも、患者へ、劇毒を飲むように勧める相手の気持ち理解できなかった。

湯たんぽを足元へ置いてもらい、下着を交換してさっぱりした気分になったせいか、熱が少し下がり、全身の痛

## < 小説 >

みもほんのちよつと弱くなってきた。

美登里が、

「明日、優香たちを八幡平スキー場へ連れて行って遊ばせてから、来るね」

「孫たちへ、……お年玉をあげてください」

彼女が部屋から消えた途端に、臉の裏へ意識が滑り込んでいく。

「……だからね。署名してハンコを押してくれない。でないと、下ろせないのよ」という声が聴こえて、目が覚めた向かいのベッドの脇で煌びやかな服に身を包んだ中年の女性が、父親らしい患者に対して両手を合わせて拝んでいる。女性の腰まで垂らした髪が、ピロードのように艶々と黒い。昨夜、美登里から聞いた話によると、患者は、がんの末期に差し掛かっているらしい。二時間おきに注射を打ってもらっているそうだった。

「金が。……いつもお前はそればかりだな。見舞いにも来ないで、……かと思えば。……今度は、男へ何を買ってやるのだ。……一体、何の仕事をしている」

患者は、途切れ途切れに尋ねる。

「それは、誤解よ。でも、スナックに客が来なくてね。生

活費がいるの。だから頼むわ」

「うーん。……あ、痛いよオ。ボタンを押してくれエ」

女性がナースコールのボタンを押したようだ。直ぐに男性の看護師がやってきて、患者の同意を求めた上で何かの注射を打った。

「俺はなア。……看護師さん。……進学高で応援団をやっていたんだ。国立大を出て銀行に勤め、偉くなった。……これからだって時に死ぬんだからさ、たまんないよなア。……娘は金を湯水のように使っしよア」

看護師の腕を掴んでいるらしく、

「分かりました。何度もお聞きしました。ご立派ですね。また痛んだら呼んでください。手を離してください」

メディカルウェアを引つ張る布の音がした。部屋の外へ出ていく看護師の後ろ姿が消えた。再び眠りへ落ちた。

雨の音が頭の中をかけめぐり、意識朦朧となったまま二日間が過ぎ、三日目にERRから急性期病棟へ移動した。

朝の食事が運ばれた。極端に短いスカートを穿き、マスカラをつけて金粉をまぶした紫色のアイシャドーを塗り、長く伸ばした爪にマニキュアを施した若い看護師へ、  
「そこではなくて、ベッドの上で食べますから食卓を設え

てくださいませんか」

酸素吸入器を外して頼んだ。

「えつ。そんな状態で食うつてのかよオ。……この死にぞこないめエ。……しょうがないなア」

ぶつぶつ言いながら、相手は、ベッドの上にテーブルを設置した。ベッドの柵は右側よりも左側が低い。そこへテーブルを乗せて、食膳を置いたものだから、安定感を欠いた柵から味噌汁がこぼれる。「ちゃんと置いてくれないか」と、叱るうとしたが、知らぬふりをして、さっさと部屋の外へ出て行った。

酸素吸入器を外して、食事を摂った。死の淵にある人間は、こんな風に聖職の看護師から暴言を投げつけられるのか、と、身震いがした。もしかして幻覚と幻聴だったのか、と、信じられない気もする。いくら何でも看護師が、「この死にぞこないめエ」と、喋るはずがない。

向かいの患者は、何度もナースコールのボタンを押している。

看護師は、

「どつしたのあ」

と、スピーカーで訊くだけで。

「痛いよ。おしっこ」

「はい、お待ちください」

同じ会話が繰り返される。

部屋に設けられているスピーカーのスイッチが切られていないらしく、ナース・ステーション内の賑やかなやり取りが聴こえる。

熱いタオルは、アルバイトの職員が運んできて、気の毒そうな顔をしてはくれるものの、

「清拭は、私たちがやるのは禁じられていますので」

と、柔らかく断られる。

身体を清拭する役目の看護師は、最初のうちは直ぐにやって来てくれたが、度々の要求に耐えられなくなり、いくら呼んでも来なくなった。掃除のおばさんは、何を尋ねても、一切答えない。無言で、ごみ箱のごみを袋に入れてベッド下の埃を掃くため、モップを動かすだけだ。

看護師長は、ほんのちよつとだけ、挨拶程度で顔を見せたものの、ボケベルの音に引つ張りまわされて、落ち着かない。看護師たちは、末期患者の病棟につきつきりらしく、私たちの部屋は、中を一瞥するだけだ。

午後の二時過ぎに、心底疲れた表情の看護師がやって来て。

「あらア、どつしたのかしら。冷たくなったタオルがこん

なところ有るわ」

「朝の八時から五回も、……コイルボタンを押して、お願いしているんですよ」

酸素吸入器を外して説明した。

「気が付かないで、すみませんねエ。タオルは熱いのに変えますから、背中以外は、ご自分で拭いてくれませんか」

「少しだけでいいから、休ませて欲しいのよ、と言いたげだ。」

「吸入器をつけたままやるのは、出来ないから。外してやってもいいですか。点滴の翼状針だって抜けたら大変だし」

権藤医師から、「酸素吸入器は許可なく絶対に、外さないでください」と指示されている。

「困ったわねエ。大丈夫だと思っただけ。……新聞などでご存じのように、看護体制が足りないので、無理のない程度でやってくださいね」

### 三

看護師に熱いタオルで背中を拭いてもらったあと、酸素吸入器をつけたまま自分で下半身の汗を拭い、下着を取

り換えた。翼状針が抜けないように手首を動かすのに難儀した。疲れが出て再び高熱を発し、意識が朦朧となった。

身体が異常に寒く、冷たい。湯たんぽを両脚の先と腰の両脇に置いて、下着を三枚重ねた上に、毛布を掛けて過ごす。寒いのに汗が冷たく肌を濡らす。ナースコイルで、看護師を呼べども、直ぐはやってこない。

酸素吸入器を取り外し、点滴の流れを一旦止め、朦朧となりながら、下着を脱いで汗を拭きとり、新しいのに取り換える。汗で濡れた下着は、上下合わせて六枚、午前中に着替えた分を加えると十八数にも上った。美登里は、保育士の仕事の上に、朝晩の付添い、洗濯物の片付け方に追われて身体を壊し、風邪を引いた。

入院して十日目辺りから、皮下血中酸素飽和濃度の数値が改善され、それに伴って意識が正常に戻り、体温も三十八度を切るようになった。酸素吸入器も朝晩に稼働するだけとなり、点滴注射の時間も日中だけとなった。

電源を落としていた携帯電話のスイッチを入れると、水戸市にいる兄から「その後、変わりないかい」と、電子メールが届いていた。「肺炎で入院中。ようやく危機を脱出」と返信する。

非通知設定の着信記録があった。かかって来た時間を

### < 臯月雨 >

確かめると、午前一時五十四分であった。正体不明の人物が、何年も前から付きまとっている。最初は、真夜中に、何度も自宅へ「無言電話」をかけてきていたが、最近は、携帯電話へも寄越す。ストーカー行為で、訴える方法がないものだろうか、と考えている

美術教室でモデルを務めている大館充子から、

「訴訟の文章を作るまで、絶対、死ぬなよ。あれほど、おいらの闘いを支援するって言っていたのに。生還してくれよ」

と、メールが入っていた。派遣先の大企業で、人材管理課長を兼ねている上司から、セクハラを受けた彼女の本人訴訟を準備する書面作りが、未完のままになっている。

ストーカーに対する怒りと、大館から聞かされた、おぞましい体験とが、ERに収容された日を前後して夢の中に現れ、意識朦朧の最中に一種の妄想を生み出したのかも知れない、と思った。

「退院したら、続きをやりませう。それまで、お待ちください。まず、早く相手が住んでいる住所と、実際に入出入している証拠を突き止めておくように。それが決定的だ」

メールを返した。

美登里に車椅子を押しもらいながら、研修室のドアを開けた。外来の診察室とは打って変わって、内装が豪華で調度品が整っていた。立派なテーブルとレザー張りの椅子、鍵の掛かった書庫がずらりと並び、中型のテレビもある。

権藤医師が、

「どうぞ、並んでおかけください」

椅子を指さした。ヘッドサイドで事前に聞いた話によると、これから、サレドの服用方法と使用上の注意事項等について説明を受けてから、書類へのサインを行う手順になっている。

「どうですか。少しは気分が良くなったようですね」

相手の喋り方に対して、一体、カルテにどう記載されているのか。看護師からどのように報告を聞いているのだろうか、と首を傾げた。

「確かに、危ないなという悲壮感はなくなりました。でも、まだ熱があつて歩くのでさえ辛いほどです」

こうして話をするだけでも、息が切れて、汗が体中に吹き上がるのだけは、何としても気味が悪かった。

「検査の数値を見る限りでは、大分良くなってきているんですよ。白血球は、少し多いけれども、段々に下がるで

しょう。……時間の問題ですよ。せっかく、サレドが保険適用になっているんですから、この際、経済的な負担はともかく、服用して免疫力をつけるのが肝要かと思われ、学会でも注目していますしね」

相手は大きな成果が出るのを期待しているようだ。

「分かりました。退院したら、適当な時期から始めてください」

左の肺が息苦しくて我慢できない。早く、セレモニーを終わって欲しかった。

「では、約一時間、ビデオで研修していただきます。終わったら、部屋に戻らないでお待ちください。私は、病棟で仕事をしますからね」

慣れない動作でDVDを再生し、それを確かめると、部屋の外へ出て行った。

サレドを服用することによって発生する副作用は、想像を遙かに超える重大なものであった。研修が進むにつれて、美登里と一緒に映像を見続けるのが辛くなった。サレドを服用した男性患者は、異性と性交渉を行う場合、避妊具を装着するだけでなく、女性にピルを服用して貰うか、卵管を結紮するように求めることが肝要と、わざわざスケッチ化した画像を流したのだ。

## < 小説 >

## < 臯月雨 >

す

誓約書は、H製薬株式会社に対して、患者及び患者の関係者から、患者自身の個人情報に関する問い合わせがあった場合、本人であることを確認する仕組みを了解させるもので、同意書には、サレドの危険性と避妊方法、精子の提供不可、保管方法、万が一に起きた事故の責任、個人情報の登録など多方面に渡って記述されていた。

「これで良いでしょうか」

手渡した書類が、やけに重く感じられた。

「記入洩れはないですから、大丈夫ですよ。この後、理解度の確認票へ記入してもらってから、誓約書と同意書と一緒に製薬メーカーへ申請します。登録書が下りて薬が届くまでは、二か月間かかります」

手引書に沿って、時間をかけながら丁寧に説明している。

「じゃ、早速、理解度のテストをして下さい」

「いいですか。質問への回答が正しいかどうかは、私が判断できませんからね。肝心なことは、避妊の方法と薬の保管方法ですから」

「こっちは一生懸命にやっているんだぞ。真剣に聞いてくれよ、と言いたそうだ。」

私は、大病をした上に、二度の帝王切開をしてまで二人の子を設けてくれた彼女の気持ちを考えて、居たたまれなかった。六十過ぎの、末期がんの男へ、避妊具の使用を教え込んでも仕方がないだろうに、と時間の過ぎ去るのを待つて、ひたすら沈黙するだけだ。急に咳と痰が連続して出てきた。部屋の気温が低い。

彼女が眉間に皺を寄せ、

「療養中の患者に対して、急いで研修を受けさせないといけないのかしら」

「早く、ゴーサインを出したいのだろうな。患者のために、これしかないと思っっているのか。それとも、独立採算を強いられて診療報酬を稼がねばならないのか。秋の学会で発表したいのか、良くわからないな」

「もっと、体調が安定してからにしてほしいわ」

権藤が研修室に戻って来た。

「どうでしたか。理解できましたか」

粘性のある光を宿した目で、私と美登里の顔を交互に見つめた。

「大体は……で、書類の手続きはどうすればいいんですか」

「では、最初に誓約書と同意書へのご記入をお願いします」

三日後、病院から退院を迫られた。

「体温も大分下がったし、通院治療で十分でしょ」

というのが、権藤の診立てであった。少しでも早く退院して、美登里の負担を軽くしてあげたい、と判断して応じた。

咳と痰はひっきりなしに出る。体温も三十八度と少し高い。歩けなくて車椅子に乗ったまま、病室を出た。ナーズ・ステーションのカウンター前で車を止め、看護師たちへお礼の言葉を述べた。丸いテーブルの周りで談笑している彼女たちの方へ会釈すると、一人だけ背中をこっちへ向けて顔を隠す者がいた。

「死にそこないめエ。食えるのかよ」

と暴言を吐いた、若い看護師である。

「お忙しいところ、お世話になりました。お蔭様で、命だけは、助かりました。みなさん、頑張ってくださいーい」

病院の玄関に立つと、病室内のそれとは気温が全く異なっていた。屋外は氷点下で、吹雪いている。向かいのマンションの一階と二階は、地吹雪で見えない。美登里が駐車場から車を運転して来るまで、ドアの内側で待った。身体から体温が奪われて、震えが湧き上がってくる。

「このような状態で、肺炎から回復できるのであるのか。」

美登里も風邪気味だし」  
と不安になった。

帰宅したあと、咳と痰がひっきりなしに出て、熱が三十八度五分に上がった。何をするのも億劫になり、寝床へ臥した。

二日後に、再び救急センターへ駆けつけ、ERに収容された。

「今回は、これで俺の命も終わりか」

兄弟たちへ連絡して置こうと考えた。意識朦朧となつて過ごし、安定しないままに、ERから急性期病棟へ移った。二十四時間、酸素吸入器がつけられ、抗生物質を点滴された。手を動かすのは、難しく、指先を使うだけだ。

朝晩は、美登里が付き添ってくれるから不自由するとは無かった。妹が、応援に駆け付けて洗濯物を持って行った。問題なのは、日中の療養である。

看護師たちは乱暴な態度を取る者が少なくなく、熱いタオルを頼んでも、

「後で！」

下着を取り換えて欲しいと頼めば、

「手が空いたら！」

半日、待たされることもあった。中には、左右が不揃

いの柵の上に板を乗せて、食膳を置き、「ホレ、食べる」と言わんばかりの眼で、見る者もいた。

美術教室の同僚と、外資系保険会社の先輩、青年運動時代からの親友が見舞いに来てくれた。東京から駆けつけて来てくれた長兄が、

「ERに居るのかと考えて行ったらさ、克俊と全く同姓同名で生年月日も同じ患者がいたよ。危篤状態らしい」

「そんなことがあるのか」

びっくりした。二日後、何となく気になり、看護師に頼んで売店から岩鷲日報を買ってきてもらった。市の慶弔欄に、同姓同名で年齢も同じな、男性の死亡記事が載っていた。

美登里が、「青春の希望を語る会」から帰って来た。青年運動のOBたちが、古くなった青年会館を建て直すために開いた集いである。

「克俊さん。貴方は亡くなったって思われているわよ。一応、元気ですつて答えただけね。信じてくれない方や、お悔みの言葉をかけてくれた方もいて……」

「そんならさ……亡霊になって、世間を驚かせてやろうか」

#### 四

外来での診察を終えて、一息つき、ほっとした表情の権藤が、心配げな顔を見せ、

「どつですか、塩梅は」

「脚が痛いし、呼吸が苦しいし、咳と痰が出るし……。汗をひっきりなしにかくので、困っています」

酸素吸入器を外して答える。

「前回は、ちょっと退院を急がせたので、今度は、しっかりと治療させて貰います。この病棟は、急性期の患者が多くて、貴方の看護体制が十分でないから、二、三日後、別の病棟に移っていただきます」

真剣な眼である。体温が三十八度に下がり、皮下血中酸素飽和濃度が平常値に近くなると、看護師たちが身の回り用品を袋に詰め、翼状針を付けたまま、私を車椅子へ乗せた。

移動して驚いた。小児科病棟だったからだ。廊下からガラス越しに部屋の中が見えるように造られており、入り口にプリキュアや蝶、小鳥などの絵が貼られていた。部屋の中には、子どもではなく、大人が収容されていた。病棟は、シンとしていて、たまに、三つ隣の部屋から、小児の

泣き声が聞こえるだけである。

点滴の管が再装着された。酸素吸入器の設置は、呼吸が安定したために必要性が無くなっている。看護師たちは、急ぎ足で歩くこともなく、求めれば直ぐに熱いタオルで身体を拭いてくれ、下着の交換も手伝ってくれる。

「川代さん。お風呂に入って髪を剃って下さい」

と、巡回して来た看護師長が注意した。

「風邪を引くから嫌ですよ。俺は、二〇一三年間、風呂へ入ったことがあります。髭は歩けるようになったら、切ります」

熱を発していないときでも、熱いタオルで身体を拭くだけだ。

「ウフフフ。あのね。そんな勝手なことを言っていて、駄目ですよ。ちゃんと治して退院したかったら、風呂に入っても熱が下がらないという結果が出るまで、頑張ってください」

相手は、患者の身勝手を許さないわよ。「子供じゃないんだし」と言わんばかりだ。

「努力してみます」

「絶対に、やるんですよ。男は身だしなみに気を使いなさい」

「分かりました。わかりました」  
向かいのベッドで、派手な表紙のグラビア週刊誌を読んでいる患者が、私たちの会話を聴いて可笑しかったのかぶつと噴出した。日焼けした半袖シャツ姿の身体へ、筋肉が盛り上がっている主だ。  
「なんですか。笑い事じゃないでしょ」  
看護師長が、つかつかと近寄って行って週刊誌を取り上げた。  
「露骨な本ばかり読むと、腰のヘルニアは治りませんよ」  
掴んだ本の間から、ヌード写真が見えた。  
「おい、おい。返してくれよ。俺の元気のもとだからさ」  
「ウフフフ。だめ、だめ。大人しくしなさいってば」  
体温が三十七度台下がったのを見計らって、入浴した。貝殻印の剃刀は美登里が購入してきてある。髭を剃るのは三週間ぶりであった。鏡を見て驚いた。汚れて長くなった髪が顔の半分を覆い、顎鬚が耳の下から首の根元まで黒く染めている。  
「これじゃ。叱られるのも無理はない。権藤先生にも毛嫌いされるわけだ」  
さっぱりとした気分ベッドへ横になった。そこへ体温の計測と食事の摂取具合を聞きに、看護師がやってきた。

仕切られているカーテンを開けて、  
「あれ、貴方はどなたでしたっけ。えーと……。川代さんですよ」  
「そうですよ」  
権藤医師がやってきて、  
「……どうですか。具合はあ。……髭を剃ると、顔が見えていいね」  
「午前中に風呂へ入りました。熱が出るかと思いましたが、いまのところ異常はありません」  
「えーっ。風呂は、まだ早かったんじゃないのかな」  
看護記録を読みながら、戸惑った返事だ。  
「先生。それはね、私が指示しましたのよ。毛むくじやらなんですよ」  
後ろから、看護師長が答えた。私が入浴したと聞いて、すつとんで来たらしい。  
「それなら、仕方がないけどね。ナース・ステーション責任者の君は、よくやってくれるなあ」  
権藤は苦笑しながら、看護師長と私を交互に見たあと、直ぐに帰った。  
携帯電話に大館充子から、メールが入った。  
「現職の元同僚が、会社の古い職員名簿を探し出して、セ

クハラをした奴の住所を調査。出入りしている現場の写真をゲット。万歳」  
「派遣仲間へ、法廷での証言に協力して貰うように、頼め。そこまで出来たら、セクハラした相手へ手紙を送って、最後の交渉をするよっ」  
と指示する。  
数日たって、  
「川代さん。そろそろ退院してはいかがですか。あとは本人次第ですよ」  
権藤が、恐る恐る薦めた。  
「今日の土曜日でしたら、妻が迎えに来られると思います」  
「そのようにさせていただきますか。これで、ようやくくほっとしましたよ」  
心底、優しい目だ。

あの時、権藤が見せた人間らしさを思い出して、一瞬、哀しい気分となったが、あまり拘泥しないことにした。  
美登里が運転してくれる車は、北上川を渡り、新緑に染まり始めた並木道を通って、緑が丘の自宅へ向かう坂道へ差し掛かった。岩手山へ陽が射して、残雪を銀色に染め

ているのが見えた。  
自宅へ戻ると、大畑村の歯科開業医である前田京介から留守電で、  
「仮設住宅が建設されたので、今度は、そっちに移ることにになりました」  
「おめでとっ御座います。良かったですね。後日、また伺います。応援していますよ」  
と、携帯電話へメールを送った。  
前田のもとへ駆けつけてから、早くも一か月を過ぎている。前田は、巨大地震と大津波で、自宅とクリニックを流されたのだ。  
反射式ストーブで暖を取り、日記と照らし合わせながら、サレドの使用説明書を読んでいると、美登里が、  
「前田先生は、不屈だね」  
「負けては居られない」  
応えた。  
「サレドの説明書には、副作用のこと、どう記されているの」  
「……えーと、こう書いてあるよ」  
サレドを使用することによって起きる身体の状態を、日記に残っている記憶をもとに答えた。

権藤医師から、サレドを処方された日の夕方、二階から布団類を一階の畳部屋に下ろした。薬の副作用で階段から落ちこちたら大変と考えて、私だけ、一階で寝起きすることにしたのだ。

就寝前に、多発性骨髄腫の治療薬サレド・カプセル百を口に入れ、コップの水で喉の奥へ流し込む。食道を通ったカプセルが胃に落ちて、間もなく、溶けた劇毒が血液内に吸収され始めるのを覚えた途端に、体の芯に重苦しい嫌な悪寒が奔った。

掛布団が重く身体を押し、ふいに脈絡のない思考が飛び出して、あちこちへ漂い、意識がまばらに薄れた。代わって遠くから蝉の啼声が頭脳内に響きだした。サレドを服用する三十分前に飲んだ睡眠薬が、眠りを促進させているのだ。

いつものように両脚の痛みが和らぎ、眠れるなど、思った。意に反して身体全体が硬直し出した。美登里が置いてくれた腰の両脇と両脚先にある湯たんぼの暖かさが、唯一、生きている実感を脳に反映させてくれるだけだ。

胸に不安が大きく膨らんだ。もしかして、……このまま、あの世に逝ってしまうのであるうか。美登里の手を握り、今までの献身へ、

「有難う。幸せだったよ、君と結婚して良かった。ずっと長生きしてね」

感謝と永遠の別れを告げるべきだった。

最後にもう一度、息子と娘へ、

「おかあさんを頼む」

と託し、優香たちをこの腕に抱いて、

「愛しているよ。お爺ちゃんのことを忘れないでね」

言いたかったと、悔やんだ。涙がつつと頬から首へと零れ落ちる。気が遠くなって、すっと意識が消えた。

「おじいちゃん、だいすき。はやく、びょうきが、なおれーっ」

聞きなれた声が近くから聴こえた。妖精のような羽根のある衣装を着た孫の優香が現れて、電飾で光る魔法の杖で私の鼻をくすぐった。冬なのに、窓の外へ大きなガマズミの樹が茂っていて、咲き始めた冠のような白い花へ、臆月雨が降り注いでいる。

「優香ちゃん。頑張るからね」

答えた途端に、くしゃみが続きさまに出て、身体が海老のように跳ねた。覚醒して気が付くと障子がぼんやりと明るくなっている。階下の動きに驚いたらしく、美登里が階段を下りてくる音がした。

## < 臆月雨 >

襖戸を開けるなり、

「克俊さん。大丈夫ですか」

「優香が夢に現れて、応援してくれたよ。くしゃみと鼻水が止まらない。……トイレに行こうと思って立とうとして、も、よろめくのさ」

蒲団の上で膝を折った。

「ゆっくり、ゆっくり。……疲れがひどいね。頬がこけている」

彼女は私の顔を見て仰天している。脚に力が入らないようにやく立ち上がった。身体がぐらぐらして歩けない。床柱に手を突いた。頭が首の上でゆらゆらする。

「いま、ストープに火を入れて、ご飯を用意するから」

手洗いで用を足して、顔を洗い食卓に座った。気分が楽になっている。

「いやー、凄くてしんどかった」

「劇毒って書いてあるものね。がん細胞だけでなく、他の細胞も殺してしまうんですよ。神経もおかしくなるわよねこの先、どうなるのかしら」

不安を掻きたてたように。

「うーん。まあ、なんとかなるだろう。権藤先生は、“これしかない”って言っていたからね。ところで、今日中に

書類を会社に届けなさいといけないから、車を貸してくれないか」

私は、保険の代理店として駆け出したばかりだ。

「こんなときに悪いわね。医療費の自己負担分を稼いでいただかないと、我が家の経済はパンクしてしまうわ。美術教室のアルバイトは、当分出来ないですよ。働かないと、優香たちへ会いに行けないよ」

冗談気味に返してきた。

蒲団の中で、本を読んでいると、腐った銀杏の実の臭いが首の後ろから漂ってきた。驚いて枕元を見ると、耳垂れがタオルを濡らしていた。両側の耳から膿が流れ出して首を伝って落ちたのだ。

麵棒で拭きとらなくてはと、思った。起き上がるうとしたが平衡感覚が鈍くなってよろめいた。這って居間へ行き、薬箱から麵棒と脱脂綿を取り出した。耳垂れはとめどもなく出て来て、頭の芯まで腐ってでもいるかのようだ。「グロッキーって、こんな時に使うんだな。ギブアップ」

保育士のアルバイトから戻った彼女へ、冗談にもならないことを言っただけを紛らわした。

先生の指示では二週間、服用すれば効果が出るんですよ。

## < 小説 >

なんとか踏ん張ってみましようよ」

深い眠りの中で、大きな揺れを感じた。建物が軋み、柵が壁に擦る音がした。収まるだろうと、考えたが長い。逃げないと危ない。臉を押し上げて眼を開けたが、肝心の身体が目覚まさない。

二階の寝室で休んでいる美登里のことが心配になった。仕事と看護の疲れが重なって、大地震にも関わらず、ぐっすり眠っているらしい。布団から這い出して、這いつくばりながら襖を開けた。

一階に向かって壁を叩き、大声を上げた。這って玄関の土間までたどり着いた時に、彼女が階段を下りてきた。

「外へ、早くう。ん、ね、ねーっ、げ」

必死に叫んだが、それつは回らない。

「待って、いま戸を開けるから」

彼女が、靴をつっかけ外へ出ようとした時に、揺れが小さくなった。パジャマの上にオーバーを羽織らせてもらった。しばらく玄関の土間に座りながら、余震が来ないかどうか様子を観た。居間から運び出した反射式のストープに火を入れて、廊下で暖を取った。

畳部屋のストープにも火を入れて部屋を暖めようとし

た彼女が、

「大変よ。本棚から落下した大量の書籍が布団の上に散らばっているわ」

「どつりで、這い出す時に重かったわけだ。浮世絵で身体を圧迫されたんだな。アハハ。あっ、痛い」

背中が痛み出した。朝食を摂ったあと、全身にかゆみと湿疹が発生した。目ヤニがしきりと出る。舌を出して手鏡で調べると、口内炎が始まっている。

関節がぎしぎしして歩行が困難だ。四つん這いになってトイレへ行く。終わったなと思って、パジャマのズボンを上げるとまたもよおして、下痢が収まらない。

「これじゃあ、生きる屍だな。代理店の仕事はおるか、大館さんの訴訟も、被災地への救援も出来ないよ」

「どうする。我慢できないのなら止めてもいいと思うわ。残念だけど」

もう少し、頑張れないの。「高い薬代を払ったのに」、と言いたそつだ。

「そうするよ。一旦、退却して。当面の課題に取り組みむかない」

## 五

## < 小説 >

## < 皐月雨 >

「サレドの服用を続けていけば、いいこともあつたかも知れない。でも、中止したから、大館さんの支援もやれた。前田先生と沿岸部の町へ見舞いにも行けた。そう考えるしかない」

「そのように思わないと、あの時期の様々な難局を乗り越えられなかった気もするわね。食事が出来ましたから、どつぞ」

大館が持ってきてくれた、冬越しの人参が油で炒められて皿に載っていた。

「どつりで、さつきから、ぐうぐうと、お腹が鳴っているわけだ」

サレドの説明書と日記を本棚に仕舞い、食卓へついた。

美登里が、

「充子さんは、元気かな」

「訴状を書くのに、四苦八苦しているべな」

セクハラを受けた彼女の反撃は、いい線まで進んでいる。早速、携帯で、「明日にでも相談に来い」と電子メールを送った。

「美登里さん。俺は、先生方から意見を聞いてみるよ。抗がん剤の効果と、それ以外の方法がないかどうか」

昔、勤めていた仕事の関係で、知り合いの医師が多い。

「それも、一つの方法かも知れないわ。長生きして貰わないと、私だけの少ない年金では、暮らしていけない」

友人の運転する車に乗って、盛岡を始め県内のあちこちを回り、抗がん剤服用の是非と他に良い治療方法がないかどうか尋ねた。

生活習慣を見直しながらも、直ぐの服用を薦める医師が殆どであった。一方で、自分が、がんになったら、「抗がん剤は服用しない」という医師も少なくなかった。

「抗がん剤は止めて、玄米菜食療法も一つの選択肢ではないでしょうか」

と、独自の見解を述べる医師が、一人だけいた。老人医療費無料化の発祥地、西和華町沢内の開業医、小田中博貴である。小田中の意見を聞いて、塞がれていた窮地を脱出する突破口が見えた、と感じた。

沢内は、皐月雨が、高地を彩るナナカマドの冠のような白い花へ打ち当たって、空中へ花粉を巻き上げていた。

「川代さん、良かったですね。ぼくの親友も、すい臓がんで苦しみながら亡くなりました。早く、この話を聞いてあげば、役立ったかも知れないなあ」

友人は、ため息を付いている。

「友が逝ってしまうのは、辛くて哀しい。お互い、用心して長生きしよう」

「一月後、美登里と一緒に小田中クリニックを受診し、小田中医師へ、

「抗がん剤の服用を中止して、玄米菜食療法の指導を受けたい」

「この前、川代さんが帰ってから、いろいろと勉強しました。これを読んでみてはいかがですか。要するに病気を治すのは患者さん自身であって、私たち医療関係者は手助けするだけなんです。そこをしっかりと弁えてください」

そう言って、「免疫革命」と、世界的なベストセラーとなっている著書「フィット・フォー・ライフ」を手渡しで寄越した。一緒に聞いていた美登里が、早速、手帳に出版社名を書きとめる。

「先生、丁病院の先生には、どのようにお話しすればいいのでしょうか。自己末梢幹細胞移植術で権藤先生に助けられたのに、私の勝手な判断で、受診を中断しています。困りました」

患者が多くて、昼休みもろくに取れないせいで疲れ果てると、思わず、かっとなって、ボールペンを投げつける。一瞬、殺意さえ感じさせられる権藤の態度が怖かった。い

つか再び、世話になる時が来るかもしれない。それを考えると、このままでいることも出来ない。

「先方には、私から事情を、伝えて置きますよ」

「サレドの登録も抹消されたでしょうか。今度、使うときは、拒否されるかも知れませんね」

飲まなかった二度目に処方されたサレドは返却したが、権藤に対して、話し合いによる、きちんとしたけじめを付けていない。フォローしてくれた外来の看護師に対しても、申し訳ない。

「その時、その時で、判断していけばいいのではないですか」

飽くまでも傷ついた患者の心を癒す姿勢に、思わず、つーつと涙が一粒、頬を流れ落ちた。

年明け早々、高熱を発した。身体がだるくて、沢内まで二時間の道のりを我慢して行く気力がない。市内のK病院なら、診てもらえるのではないかと考えた。

診察してくれた内科の医師が  
「川代さん。申し訳ございませんが、貴方に薬を処方できませんね」

と、切り出して、注意事項に、血液疾患の方への処方には、「禁忌」と記されている薬の便覧を見せた。

## < 臯月雨 >

「特殊な療法はやめて、すぐに丁病院か、I病院の血液内科を受診してください。うちの病院でやれることは、何もありませんから、診察代はいただきます」

美登里が怒りだした。窓口に掛け合ってきた。間もなく、診察コーナーへと案内された。

若い女医が、カルテにざっと目を通したあと、「ちょっと待ってて」

思い余って、携帯で小田中医師へ電話をかける。往診しますよ。身体を温めて、休んでいて下さい」「すみません。宜しくお願いします」

小田中が夕方、自宅へやって来た。抗生物質と漢方薬を処方してもらい、危機を脱出した。

小田中の指導を受けながら、食事内容を改善していく途中で、うっかり仕事などで無理をしてしまい、咳と痰が酷くなり、中耳炎に罹った。

初冬に高熱を発し、小田中クリニックから紹介状を買って丁病院の救急センターを受診した。待合室は風邪をひいた患者たちで混んでいた。

診察の順番を待つ間も、ひっきりなしに救急車がサイレンを鳴らして病院の裏口へやって来た。その度に、外来の診察が一部中断され、待ち時間が遅延する。

高熱と呼吸困難、全身の痛みと寒気に耐えられなく

## < 小説 >

して、他へ行かないの」

体温を測り、聴診器を胸に当てて、血液採取をするのが先決ではないのか、と反論したかったが、止めた。

「私にとっては、ここしか入院施設がないと考えました」「自分勝手ですねエ。……もう一度、権藤先生に診てもらった方がいいと思います。まア、今日は診察してあげますが、今後はどうするのか。その辺は再考ください」

体温は三十九度を超し、皮下血中酸素飽和濃度は八十になっていた。外から時折、寒風の入ってくる治療コーナ―で三時間、点滴治療を受けたあと、

「入院の必要はなし。明日、呼吸器科を受診するように。予約を入れておいた」との診断を受けて帰宅した。

一晩中、高熱と寒さ、意識朦朧が入り混じった状態で、がたがた震えながら過ごした。

呼吸器科を受診すると、一度診てもらったことのある五十代の医師が、

「あのねえ。一応は言っておかないといけないからねえ。

権藤先生に診てもらった方がいいよ。権藤先生は、心配していると思うよ。食事療法を否定するわけではないけれど、それだけでは、病気を克服出来ないんじゃないのかなあ」

「抗がん剤しかないとなったら、また診ていただきます。

「少なくとも呼吸器は、こちらにお世話になります」

微妙に答えた。

「呼吸器科に來たってことは、権藤先生にも知らせておくからねえ。あとは、自分自身で決めてくださいよ。間質性肺炎の影ががっちり残っていますから、風邪には要注意です」

「有難うございます」

「来るたびに、辛いことを言われると思うけど、それでもよかったら、一年後にでも、来てみてください」

「権藤先生には、申し訳なくて、合わせる顔がありません。逃げたいくらいです」

「……分かるな、その気持ち。でもねえ、最後は、どうするのかの覚悟を決めてくださいよ」

こつなったら、肺炎になった時の駆け込み先は、丁病院ではなく、工病院に変えるしかない。死を迎えるまで、小田中医師の指導を受けながら、玄米菜食療法を貫いていくしかない、と考えた。

翌年。冬の間、東京の息子の家で転地療養をしたあと、盛岡に戻って、再び保険の代理店を続けた。美登里は、保育士の雇用期間満了となって、私の仕事を手伝っている。

## < 皇月雨 >

大畑村の前田京介は、大震災から一年後にクリニックを再建した。この秋には、自宅を新築する運びとなっている。大館充子は、本人訴訟でセクハラをした相手へ社会的制裁を加えたあと、美術教室で知り合ったルポライターと暮らし始めている。

美登里が運転する車に乗って、沢内のクリニックを受診したあと、娘一家の住む日本海側の町へ向かった。皇月雨が、奥羽山脈の西側に有る林檎園へ、淡い青白線を引いて落ちていた。

抗がん剤の服用を中断して以降、玄米菜食療法をベースに、摂食内容の改善を図り、足揉み療法を取り入れたせいか、大きな風邪を引いたのは三度だけであった。あとは、鼻水と咳、痰が出て、中耳炎にかかったくらいだ。

元氣を取り戻したいま、がん患者たちが互いに支え合うサークルに加わって、活動を行っている。

孫の優香は、小学一年生になり、震災後に生まれた女の子の小百合は、三才になっている。

優香が電話で、

「あしたのうんどう会には、おじいちゃんとおばあちゃん、ぜったいに来てね。ゆうかは、リレーで一とうしょうをとるからね。それから、かくれんぼしよう。ずっと長くと

## < 小説 >

「まっっていつてね。アナとゆきの女王のおどりをみる？」  
「観たいな。三つ、泊まるからね。かくれんぼも、いっぱい、いっぱいやるうね。お土産を買っていくから、何がいい？」  
「えーと。ケーキ。でも……おじいちゃん。びょうきで死ぬの？」  
急に悲しげになった

「大丈夫。優香が結婚するまで生きているよ」「この目を見た

い。  
「やったーっ」